と世界帝国を結んだ遣唐使 12

奈良大学 教授

上野 誠

直接的な関係を知ることができる。
直接的な関係を知ることができる。
したがって、『万葉集』そのもののなかにも、遣唐使関係歌葉集』そのもののなかにも、遣唐使関係歌というものがあり、衛便な解説を付けた。こよる歌抄があり、簡便な解説を付けた。これによって、読者は、万葉集』の時代は、

(六〇八)に、遣隋使・小野妹子に従って渡来系の氏族であった。推古天皇十六年安は、かの地の地名をとって氏名としたのが淵という集落に住んでいた南淵請在の稲淵という集落に住んでいた南淵請をは、明日香川の上流を歩いていて、ふ私は、明日香川の上流を歩いていて、ふ

川に接したムラなのだ。 と称されていた。古く稲淵の地は、「みなぶち」 と称されていた。明日香の水源に接する地 という意味だろう。まさに、ここは明日香 という意味だろう。まさに、ここは明日香

当時の東アジア世界において、比肩することなき大帝国ができ、今後、東アジアの情勢が、時代を動かすのである。彼らは、国政の一元化による中央集権化が喫いまるのである。いつの時代も、留学生はじまるのである。いつの時代も、留学生はじまるのである。いつの時代も、留学生はじまるのである。いつの時代も、留学生はじまるのである。いつの時代も、留学生はじまるのである。いつの時代も、留学生はじまるのである。とを肌で感じたのであるう。

奈良盆地を歩いていると、古い氏族の氏名となっている地名に出逢うことがある。 名となっている地名に出逢うことがある。 平群(平群町)、安倍(桜井市)、そして稲 平郡でかいるのであったはずである。その 氏族出身者のひとりに、阿倍仲麻呂、平群 広成がいるのである。隋唐より東方、「海東」 と呼ばれた辺境の倭、日本。倭、日本から と呼ばれた辺境の倭、日本。倭、日本から なのである。

じで、最高学府である「大学」も、一応同になった。これは、学問制度についても同法体系のもとに国家が運営されていることいては、規模は別として、表面上は、同じいのは、規模は別として、表面上は、同じいで、最高学府である「大学」も、一応同においては、規模は別としている。

共有された知の存在 背後にある知識 背後にある知識 『周易』 『周易』 『尚書』 『周礼』 『儀礼』 『尚書』 『周礼』 詩 詩の受け手 『儀礼』 の送り手 『礼記』 『礼記』 『毛詩』 『春秋左氏伝』 『毛詩』 『春秋左氏伝』 『孝経』 『孝経』 理解者 表現者 『論語』 『論語』 など など 知の共同体の絆 知の共同体の構造

邛

杖。

非徴貢于苞茅。

知の共同体の構造

文は、 が 0) ことを前提に詩文を綴ることになる。逆に、 知 帰国 ような文章になるのである。 の共同体に入らない者には、 その典型であろう。 するにあたり、 王維 が書 まるで暗号 阿倍仲麻呂 11 た詩の序

化が図られることになったのである。

それ

日本の大学で学んだ若者が、

唐

0

つまり、

ここに日唐の学問制度の共通

カリキュラムで学習が行われたとみてよ

えられた責めを果たしたい。 最後に、 原文と釈義案を示して、 王維の阿倍仲麻呂送別詩序と詩 非力な筆者に与

呂の夢』

角川学芸出版、

二〇一三年)。

す

と考えている

£

野誠

『遣唐使

阿倍仲麻

綴る場合、

聞き手もその書物を読んでいる

同じ

書物を読んでいるので、

詩文を

ある。

私は、

これを「知の共同体」

の誕生

に留学し、 によって、

新

知識を学ぶようになったので

(原文)

送秘書晁監還日本国 (并序

始頒五瑞之玉 動干戚之舞。興斧鉞之誅。 舜覲群后。 有苗不服。 禹会諸侯。 乃貢九牧之金。 防風後至。

行。 若華為東道之標。 我開元天地大宝聖文神武応道皇帝。 先天布化。 乾元広運。 戴勝為西門候。 涵育無垠 豈甘心于 大道之

報以蛟龍之錦 亦由呼韓来朝。 舎于蒲陶之館。 卑 弥遣使。

経于絶域之人。方鼎彜樽。

致分器于異姓之

国

百神受職。 犠牲玉帛。 以将厚意。 五老告期 服食器用。 不宝遠物

況乎戴 髪含歯。 得不稽顙屈 膝

風。 海 東 正朔本乎夏時。 国 日本為大。 服聖人之訓。 衣裳同乎漢制 有君子之

> 物于天子。 歴歳方達。 継 旧 好于行人。 滔 |天無 涯。 貢方

蛮夷之邸 司儀加等。 位 在王侯之先。 掌次改 観。 不居

学詩于子夏 晁司馬結髮游聖。 上 我無爾詐。 一敷文教。虚至実帰。故人民雜居。 爾無我虞。 負笈辞親。 彼以 好 来。 問 。往来如 礼于老聃 廃関 弛禁。 单

始通于上国 魯借車馬。 孔丘遂適宗周。 鄭 献縞衣。 季札

高国 名成太学。 官至客卿。 必斉之姜。 不帰 娶于

在楚猶晋。 亦 何独于 由 余。

游宦三年。 願 以君羹遺母。 不 居 玉 欲其

莊鳥既顕而思帰。 関 羽報恩而終去。

昼錦還郷

首北 篋命賜之衣。 闕。 裹足東轅。 懐敬問之詔。 金簡玉字。 于 是稽 伝道

却走。 鯨魚噴 琅邪台上。 浪 廻望龍門。 則 万里 倒 廻 碣石館前。 鷁首乗雲。 **敻然鳥逝**。 則 八風

扶桑若薺。 蒼天而呑九域 鬱島如 萍。 沃白日 而 簸 Щ 浮

三寸猶在。 詩。佩両国之印。 嘻去帝郷之故旧。 陵帰魏而逾尊。 淼不知其所之。何相思之可寄 黄雀之風動地。黒蜃之気成雲 楽毅辞燕而未老。 恢我王度。 謁本朝之君臣。 十年在外。 諭彼蕃臣。 詠七子之 信

子其行乎。余贈言者。

鰲身映天黒 向国惟看日 積水不可極 九州何処遠 魚眼射波紅 帰帆但信風 万里若乗空 安知滄海東

別離方異域 郷樹扶桑外 主人孤島中 音信若為通

上平声一東韻。 王右丞集箋注

秘書省長官晁衡の日本国帰還を送る詩

干戚之舞を舞い、これを威嚇して、武器をかんせきのまいめに、服さないやからを従わせるために、 防風の民は後れてやって来た、という。たい。 かの聖帝・禹が、諸侯と会見した折でさえ、 かの聖帝・舜が、諸侯を集めて謁見せし 有苗の民は恭順の意を示さず、また、

> き、これをよく育み、天下に限りなく帝徳 さず、ご政道の大道を歩まれて、天下を安 聖文神武応道皇帝陛下は、威嚇も殺戮もなせいぶんしんぶまうどうこうてい うやく天下泰平の世となった。 をゆきわたらせたもうたのである。 はじめて、天下にその帝徳を広め、 寧にし、天命の下るに先んじて民の徳化を て諸侯に対して五瑞の玉を分かち与え、よ に、全土の長たちに金を献上させて、始め もちいて殺さざるを得なかった。しかる後 ところがである。われらが開元天地大宝ところがである。われらが開元天地大宝 民を導

皇帝陛下には、取るに足りないこと。陛下 心を砕かれたりはしない。それも、これも こと。また、南よりの献上品の徴収だけに られるであろうか。それは取るに足りない どうして西よりの献上品だけに心を安んじ として召し使うことすらできるのである。 道しるべとなし、かの西王母を西門の門番 は、すべてを総攬されるお方なのだ。 かくなるがゆえに、かの若華を東の道の

らが皇帝陛下も、 返礼として蛟龍之錦を与えたように、われ 朝してくれば、恩寵をもって蒲陶之館を宿 舎として与え、卑弥呼の使いが来たれば、 また、かの呼韓邪単于が帝徳を慕って入 大いなる恩寵をお与えに

なるお方なのだ。

政の証となさったのである。 民生は安定。天は、五老すなわち木火土金 うやうやしく働くかのように働く。ために 役人たちが、それぞれに官職を宛がわれて も帝徳ゆえだ。かくなる上に、手厚く天子 徳を慕ってわざわざやって来るのだ。これ うすればこそ、遠来の国々から人の方が、 して珍重なさることなどありはしない。そ 食・日用品は、遠くからの献上品を宝物と 意をお示しになるけれど、陛下ご自身の服 水の精のよき兆しを表して、 の祭りごとを行われるので、百神たちは、 なく分かち与え、遠来の人びとに対して厚 犠牲と玉帛という高価なるものも惜しみぎせい ぎょくほく 皇帝陛下の善

であろう。 膝を屈さざるを得ないのは当然というもの の人たるものは、 神ですら、かく額づく一 額を大地に擦りつけて、 いわんや、人

訓に従い、国である。 まさに君子の国なのだ。 の暦を用 る。 海東の国々においては、日本国こそが大 日本は正統なる中華文明に学んだ、 君子の風があるからだ。暦は夏 なぜならば、 衣裳は漢の服制を取り入れて わが中華の聖人の

そして、日本は、長い交流の歴史を経て、今ここにふたたび入朝し、古き時代からの好を、今の使節たちに引き継がせようとし好を、今の使節たちに引き継がせようとしにある国ではあっても、日本の産品を天子に献上せんがために、今はるばるやって来たのだ。

で 変夷の邸などに押し込めておいたりはしな で学さどる者は、その見る眼を改ためて、 を学さどる者は、その見る眼を改ためて、 を学さどる者は、王侯の上にある。次 級を上げ、今や位は、王侯の上にある。次

「我れは、爾を許ることなどありはしない。爾も我れを恐れることなかれ」という
古き盟約の言葉ではないが、日本は、古き
古き盟約の言葉ではないが、日本は、古き
でもって入朝してきたのであるからし

鬼軍司令殿は、髪を束ねて、この聖の国にく来れる者も、宝を手にして帰るのである。だから、人民は、自由に居を定めることがだから、人民は、自由に居を定めることがだっ、道は市場のごとく賑わっている。まさに今、天下は泰平——。

の道に励んできた。
が、詩を子夏のごとき達人に学び……学問び、詩を子夏のごとき達人に学び……学問の道に励んできた。

魯国が車馬を貸したことによって、孔子が遂に周の都に行き、礼を学ぶことができたように、皇帝陛下は仲麻呂への助力を惜しまれなかった。鄭の国の子産が縞衣を献上して、季札が始めて上つ国に到着することができたように、友たちも、仲麻呂への助力を惜しまなかった。

君は、その名を高くして、かの太学に学び、今や官はすでに客卿に至っている。一 き門閥の娘だけに限る必要があろうかと 言って、唐においては門閥の娘とは結婚し なかった。また、早々と帰国して、これま なかった。また、早々と帰国して、これま なかった。また、早々と帰国して、これま なかった。また、早々と帰国して、これま なかった。また、早々と帰国して、これま なかった。また、中々と帰国して、これま なかった。また、中々と帰国して、これま

めまい。求められる人なのだから。誠意と者であるならば、一国に留まることなど望……それは二心ではない。由余のような賢真心を持って、晋を思う心を持っていれば真心を持って、ではない。なお

惜しまれるのだ。
賢ある人は、いかなるところにあっても、

の念を持ちつつ、魏を去っていった。 いは断ち切れなかった。 るのだ。 まらず、 親を思う気持ちから……君は、ここ唐に留 に、今、 のを母に捧げんとしたかの穎考叔のごとき かの荘鳥は、 任官して三年しばしの時を経て、 君は、故郷に錦を飾ろうとして 帰国することを思い立った。まさ 高官となっても、望郷 かの関羽は、 あつも 君は、 報恩 の思

今ここに、宮城を拝して、東門より旅立と今ここに、宮城を拝して、東門より旅立とうとしている。 拝領の御衣は大切に箱に入れて、皇帝陛下の国書を懐に携えて、君は旅立とうとしている。金簡玉字のごとき尊き教えの書が、ついる。金簡玉字のごとき尊き教えの書が、ついる。ご下賜の祭器は、文明の証として、異姓の国たる日本に、今伝えられようとしている。

とくに飛び立ってゆくことだろう。
碣石館前より、果てしなく遠くに、鳥のご
はっせきかなぜん
龍門を、遥かに振り返るだろう。そして、
見楽がきん
見楽りようま

かしながら、君の行く船路の、

なんと

う。 恐ろしきこと――。大魚が浪を吹き上げる た、おさまってくれれば……船は進むだろう。また時には、雲に乗るごとくに、よる う。また時には、雲に乗るごとくに、よる がなき船旅が続くだろう。その時、八風さ でなき船旅が続くだろう。その時、八風さ

う。君の旅路のよるべなさよ。時に大浪は、 さえぎるかもしれないー 物の吐く悪気は、時に雲となってゆく手を さに全世界を浪が呑み尽くすことになる。 ろう。また、大浪は、同じく東海にあると は、浮き草のごとくに漂いゆくもの、とい ごとくに風に吹かれ、同じ東海にある鬱島 を見せ人を惑わす蜃なる化け物。その化け 議な風は、 のという。さすれば、空も天に浮かび、ま 太陽に、 いう三山を揺るがすがごとくに、激しきも 東海にあるという扶桑の島は、なずなの 海魚を変じさせて黄雀にするという不思 水を注ぐがごとくに高く上がるだ 大地をゆるがすという。蜃気楼

そえもつかぬ。
ところに寄せることができるのか。見当りしたら、ともに思い述べあう書簡を、君は、その行くところさえ見当もつかぬ。どは、その行くところされの旅路は、われらに果てしなく広がる君の旅路は、われらに

あぁ、今、君は、帝都なる思い出深き地を残して去り、本国の君臣と謁見しようとしている。君よ、その時は、かの建安のしている。君よ、その時は、かの建安のことを、日本に伝えてくれ。だからこそ、君は日本に帰って、唐日両国の官職を兼ねて、両国の懸け橋となるのだ。その文学の力で、君の国、日本の帝王の徳を広め、臣下たちの心を耕せ――それが、君に与えられた使命なのだ。

そう、弁才あるかの楽毅は、とある事情から燕の国を去っても、老いもせず壮健であったという。君も壮健であられるように。あったという。君も壮健であられるように。の後、故国の危機を救わんがために帰った。そして、尊ばれたというではないか――。だから、もし、事情が許せば、また唐に戻って来たまえ。ここ長安もまた、君の故国なのだから。

に。さあ。 私は、ここに言葉を贈ろう――。今、ここ時は来たれり! 君よ、さぁ行くがよい。

いるかなど、わかるはずもない。だから、果てしない大海原の向うがどうなって

原の東の果てのことなんて。どうして知ることができようか、青海

(そう、君の国、日本がいちばん遠いのだろう(そう、君の国、日本がいちばん遠いはずだね)。だから、お前さんのゆく旅路ずだね)。だから、お前さんのゆく旅路がたなら。だから、お前さんのゆく旅路がたから、さんを見て進むだけ。そして、お天とうさんを見て進むだけ。そして、お天とうさんを見て進むだけ。そして、

海中に棲むという怪獣の大亀の背が、 大空に映し出されるだろう、黒々と。 大空に映し出されるだろう、黒々と。

東の果ての、日の出ずるところ。そこれの果ての、日の出ずるところ。そこれが、君の故郷。故国の主人たる王は、が、君の故郷。故国の主人たる王は、

俺には想像すらもできない―― したら、君とたよりを交わせるのか、界を異にしてしまうことに……。どう今日を境に、お前さんと俺は、住む世